

「1950年代教育史」研究部会（第40回）

日時：2019年10月25日（金）13:00～15:20

場所：野間教育研究所 2F 閲覧室

出席：米田俊彦・大島宏・須田将司・鳥居和代・西山伸 各兼任研究員
吉久知延所長・金沢千秋・川上智子

内容：（1）鳥居和代研究員報告：1960年代の千葉県の長期欠席児童生徒調査

◆1950年代に生じた子どもの長期欠席問題の終わりはどこか？

◎千葉の漁業地域の経済的要因からくる長欠問題の傾向がいつから変わったのか

◎千葉県の長期欠席に関する資料（千葉県教育委員会）：『公立小学校・中学校長期欠席児童・生徒調査報告書』『長欠対策の手びき』から

- ・長欠者数・長欠率ともに年々減少しているが、千葉県は全国に比べて数・率ともに高い理由別欠席率：60年代には「疾病異常」が高率、「勉強嫌い」が主流に。「貧困」は低下
50年代終わりから特に中学校で「勉強嫌い」の割合が高まる
→50年代と60年代の「勉強嫌い」の違い

地域別欠席率：60年代初めはまだ漁業地域の欠席率が高く、60年代後半には解消傾向
→「家庭の無理解」「貧困」から「勉強嫌い」の比率が高くなっている

保護者職業別欠席率：50年代は水産業が高かったが60年代中頃には差が小さくなる

◆千葉漁業地域において50年代の長欠問題の終わりは60年代初頭とってよいのではない
か

（2）西山伸研究員報告：1950年代における大学管理をめぐって（7）—最初の学長選挙に関して神戸大学の事例をみる—

◆1953年に新制国立大学は最初の学長選挙をむかえる。その学長選考規程制定の議論を神戸大学に残された豊富な協議会（評議会）資料によって検討：『評議会記録 自27.4至28.3』『同 自28.4至29.3』（神戸大学大学文書史料室所蔵）

- ・（各大学における学長選考方法は様々）神戸大学では、直接／間接選挙となるかで議論
- ・学内対立があり、それぞれの教官数で有利となる方法を主張→旧帝大とちがひ、複数の学校が集まって新制大学となった神戸大学（キャンパスも別）では、教官の所属していた前身校によって対立が生じていた
- ・最終的には両方から支持を集めた候補者がいたため全学的にまとまって選出できた
- ・神戸大学では時間がかかっても自力で学内対立を終わらせたが、それが難しい大学では大学管理の制度化を求めるのも無理がなかったと思われる

- ・次回研究会は、2019年11月29日（金）13:00～。米田研究員、須田研究員
- ・次々回、2020年1月24日（金）13:00～